

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 曹 栄梅

論 文 題 目

中国内モンゴルにおける磚茶文化
—茶馬交易が結んだ乳と茶—

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 嶋田義仁

委員 名古屋大学 教授 阿部泰郎

委員 名古屋大学 准教授 東賢太郎

委員 名古屋大学 准教授 林謙一郎

委員 滋賀県立大学 准教授 ホルジギン・ブレンサイン

論文審査の結果の要旨

(論文概要) 中国北方牧畜民のモンゴル族には磚茶の茶文化がある。磚茶は固形黒茶の一種であるが、乳にまぜて飲まれる故に乳茶とも呼ばれる。茶樹は華中華南の温暖多雨の地域に生育するが、寒冷・乾燥草原では生育できない。しかるに、北方牧畜民族の生活に根ざした茶文化が形成された。モンゴル牧畜民の一日の食事は「2茶1食」でなりたつ。朝昼が茶で、夕が食である。接客や儀礼祭祀でも茶は重要な役割をはたし、礼法がある。茶道具文化もある。本論文は、このようなモンゴル茶文化がどのようにして形成され、それがどのような文化かを、中国語、日本語、モンゴル語の文献資料と民族誌資料を駆使して論じた3部からなる労作である。

第I部では、茶産地から遠く離れた内モンゴルの歴史・自然の特色と、中国茶文化の全体像が、茶樹の特性、4茶区茶産地、6大茶種(緑茶、紅茶、白茶、青茶、黄茶、黒茶)、茶の製造法などの体系的記述によってあきらかにされる。

第II部は、茶文化のモンゴルへの普及が、茶馬交易に注目して論じられた。茶馬交易とは、茶と馬の交換である。固形茶誕生もラクダによる遠距離陸上輸送への適応による。しかし茶馬交易は、牧畜民族と南方王朝間政治関係の変化によって盛衰した。南方系王朝の宋・明代、茶馬交易は茶馬古道に沿って主にチベットとの間で行われた。モンゴルとの茶馬交易は清朝時代に興隆期を迎える。フフオトが都市として発達し、清・口条約により、ロシアのキャフタに至る交易が活発化したからである。山西の漢族旅蒙商が活躍し、モンゴル人や回民もラクダ隊商を組織して茶馬交易に従った。茶馬交易はシルク・ロードとも結びついて西域にも広がった。フフオトは、ラマ寺院、多民族が集中する商店街の売買城、モンゴル族が家畜を売る家畜市場からなり、多文化交流都市となった。磚茶は清朝時代になってモンゴル人の庶民生活に定着し、貨幣としての役割も果たした。清代末、ヨーロッパ勢力も中国茶の交易に着手し、茶文化の海路による拡大を推進した。しかし社会主義時代、磚茶は粗悪茶と化した。計画経済のもと、磚茶生産地が粗悪固形茶を生産する1生産地に限定されたからである。

第III部「内モンゴルにおける乳茶文化」では、モンゴル食文化自体に、朝昼は「白食」の乳、夕は「赤食」の肉、という「二茶一食」類似食事パターンがあったことが明らかにされる。磚茶はその「白食」にはいりこんだ。ついで、飲茶道具の詳細な分析がおこなわれ、①茶道具には金属性が多い、②茶道具起源にはモンゴル起源(銀椀、トンプ)とペルシャなど外来起源がある、③デザインにも漢族文化、仏教、モンゴル文化の影響があることが明らかにされ、磚茶文化の多文化的複合性が確認される。しかし現在、モンゴル族の農耕化に伴い、乳茶飲用の減少も認められる。

結論で示されるのは、中国茶文化の体系である。それは固形茶文化と葉茶文化からなり夫々に発展段階があるが、固形茶(緑茶、黒茶、磚茶)はチベット、モンゴルなどの内陸牧畜地域や、ロシアに広がった。葉茶は餅茶、抹茶、煎茶として日本にひろがり、紅茶としてはヨーロッパに広がった。

論文審査の結果の要旨

(論文の評価) 本論文は、華中華南の茶産地から遠く離れた北方牧畜民文化に磚茶と呼ばれる茶文化がいかにして形成され、いかなる茶文化が形成されたかを、モンゴル語、中国語、日本語の文献資料と民族誌資料を用いて明らかにした歴史人類学的研究である。そのために、異なった様々な問題を論じられているが、分析方法は緻密で明晰、かつ磚茶文化の背後にある中国茶文化の全体構造の解明も試みられている。

その1は、多種多様な中国茶文化の体系的整理とそのなかにおける磚茶文化の位置づけである。中国茶の多種多様な茶種の分類とその製造法が歴史的発展も考慮されつつ詳しく論じられている。しかし中国茶文化は、固形茶文化と葉茶文化に2分類される。葉茶文化は日本の緑茶や西洋の紅茶のように海路によって世界に広がった茶文化であるが、固形茶文化は、茶馬交易によってモンゴルやチベットなど内陸乾燥地域の牧畜文化地域に広がった茶文化である。固形という形態を有した固形茶はラクダによる長距離陸上輸送への適合、壊れにくさや保存可能性を有し、葉茶以前に商交易茶としての機能と形態を有した茶であった。磚茶は固形茶のなかの黒茶の一種である。緑茶が輸送途上発酵したことから開発された茶であるという。

その2は、固形茶の内陸への展開をささえた茶馬交易の詳細な記述と分析である。茶馬交易は牧畜民と漢族王朝との政治関係によって盛衰したが、湿潤農耕地域の茶産地と乾燥した内陸牧畜地域をむすぶ交易が歴史を通じて存続し、それによって牧畜文化のモンゴルに独特の茶文化が形成されたという指摘の意義は大きい。モンゴルをめぐる茶馬交易が盛況化するのは清代であるが、それには茶馬交易路のロシアまでの拡大とフフフオトなどの都市文化の発達、旅蒙商人や回民、モンゴル人などの隊商の活躍がともなっていた。ラマ教、イスラーム教など多様な宗教文化も介在した。シルク・ロードの交易文化はよく知られているが、これに連動する形で発達した東アジアのグローバルな茶馬交易文化を明らかにした意義は大きい。

その3は、モンゴルの磚茶文化内部の食文化、茶道具、茶道具文様などの詳細な記述と分析が行われたことである。これは論者自身がその生活のなかで知悉した文化であるが、これによりモンゴル茶文化の、モンゴル文化、漢族文化、ラマ教、イスラーム教、ペルシャ文化にも及ぶ複合的多文化的基礎が再度確認された。これは超多民族国家中国における民族間関係再考にとっても貴重な研究成果である。

本論文はモンゴル茶文化を唐代にまでさまのぼり考察している。それゆえに歴史資料のより厳密な読解や、史料参照の不十分さが厳しく指摘される面もあった。しかし中国茶文化とモンゴル茶文化について数多くの知見をあたえるのみならず、中国語、モンゴル語、日本語文献を駆使し、かつ自己の民族誌研究をささえにした構想力豊かな歴史構造的な研究として本論文は読みごたえがあり、批判的検討にたえうるすぐれた研究として、課程博士論文(文学)として一同合格とした。